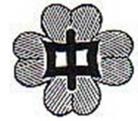




小原小・中学校 学力向上だより



「力」をつける!

平成30年12月21日号
文責 校長 成瀬 啓

「非認知的能力」(非認知スキル)(社会情動的スキル)をつける!!



昨日に引き続き、「非認知的能力」の話が続けます。それでは、この「非認知的能力」を育てるために私たち大人は、子供たちにどのような支援や働きかけをすれば良いのでしょうか？お茶の水女子大学が「全国学力・学習状況調査」の成績と、児童・生徒及び保護者への意識調査との関係を分析した結果がそのヒントになりそうです。

図1：非認知的能力とは

(1) 保護者の働きかけと非認知能力

(NHKエデュケーショナル「すくこむ」ホームページより) まず、保護者の以下のような日常的な働きかけが、子供の非認知的能力を向上させていることが分かりました。このような働きかけは、子供が小さければ小さいほど効果が高いと言われています。

- 子供の良いところをほめるなどして、自信を持たせるようにしている。
- 子供に努力することの大切さを伝えている。
- 子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。
- 毎日子供に朝食を食べさせている。
- 地域社会のボランティア活動に参加するよう子供に促している。

(2) 家庭環境と学力

次に、家庭環境と学力について分析した結果、保護者が以下のような働きかけをしている家庭では、学力が高いという傾向が見られました。

<保護者の働きかけ>

- 学校の出来事、友達のこと、勉強や成績のこと、将来や進路、地域や社会の出来事やニュース等の会話が多い。
- テレビ・ビデオ・ゲーム・ネットなどのルールを決めている。
- 子供に努力することの大切さを伝えている。
- 子供に最後までやり抜くことの大切さを伝えている。

<保護者の教育意識や諸活動への参加>

- 将来、子供に留学をしてほしいと思っている。
- 自分の考えをしっかりと伝えられるようになることを重視している。
- 地域や社会に貢献するなど、人の役になることを重視している。
- 保護者自身がPTA活動や保護者会などへ参加している。

(3) 子供への働きかけのポイント

では、この力をつけるため家庭で何を働きかければ良いのでしょうか？
私が考えるそのポイントを述べたいと思います。

①会話する …「広げるあいづち」と「深めるあいづち」を上手に使い分けて！

最も大切なのは、親子の会話の量と質です。「今日学校どうだった？」と投げかけ、学校での出来事等を、毎日子供に話させてほしいと思います。その際には、その言葉をしっかり受け止めて、「それで？」
「その時どう思ったの？」といった「広げるあいづち」と、「その時あなただったらどうした？」
「この次どうする？」といった「深めるあいづち」を入れてほしいと思います。また、時には、社会のこと、将来のこと、ニュースのことなどを話題にすると、子供の視野を広げ、考える力を伸ばすことにつながります。



この親子の会話の量と質が、子供の認知・非認知能力両方の基礎となります。さらには、毎日のこの暖かい親子の会話が、親子の愛着形成につながるとともに、子供の精神的な安定にもつながります。日々の忙しさで子供との会話が少なくなってしまうのは、私も子育てをしていてよく分かりますが、子供の将来のためにぜひ続けることをお勧めします。

②挑戦させる・見守る・ほめる・認める・励ます…励ましの言葉がけが大切！

子供が何かを始めたとき、親の一言がとても重要となります。例えば縄跳びの練習をしている姿を見かけたら、「何回跳べた？」という成果だけを問うのではなく、まず、「跳べるようになったね(^)」とほめた後に、「こんな練習するともっと上手になるよ」「もう少し練習したら、もっと良くなるね」といった、子供の意欲に働きかける言葉がけをすると、自分からさらに練習するようになり、結果回数も増えることにつながります。このような経験を繰り返すことにより、子供の自己肯定感を向上させ、何事にも意欲的に取り組む子供になります。

③最後まで！ …「GRIT (やり抜く力)」を！

学校生活の中で「わがんねー」「むりー」「できねー」「これでいいや！」と言って、途中で投げ出そうとする子供を見かけます。今「GRIT (やり抜く力)」が注目されています。アメリカをはじめ、世界のビジネスマンやアスリートに共通しているのは、何事も成し遂げようとする「粘り強さ」があるのだそうです。先ほどの縄跳びの声かけのように、一度決めたことややろうとしたことは、最後までやり通すことができるよう、根気強く励ましてほしいと思います。

実は、根気強く励ます親の気力・体力の方が大変なんですけど・・・(^;)。

④自分で決める …「あてがう」のではなく、自分で選ぶ、自分で決める機会を！

毎日忙しい生活の中で、「あしなさい！」「こうしなさい！」と、つい指示してしまいます。それから、「これにしなさい。」と親が決めてしまうこともよくあることです。私も、子供があれこれ悩んでいる姿を見て、つい言ってしまったことがよくありました。

最近、自分で決めることができない子供が増えてきているように思います。誰かに決めてもらわなければ動けない「指示待ち子供」になっていませんか？指示待ち子供は、自分で決めていないので主体性がなく、いつも自信なさげに行動します。またいつも人からの指示で動いているので、「私がきめたんじゃない。」と、人の責任にしたり、不平不満を言う特徴があるといわれています。

親が「あてがう」のではなく、自分で選択して、自分で決定する機会を増やしてほしいと思います。自己決定することで自己責任が生じ、責任をもって行動できる子供に育つといわれています。